

## Léon Charpentier's Article "Un Don Juan dans la Littérature Japonaise"(1906) : A Document on the Acceptance of The Tale of Genji (Genji monogatari) at the Beginning of 20th Century France

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-06-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 真太郎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://mu.repo.nii.ac.jp/records/850">https://mu.repo.nii.ac.jp/records/850</a>

## レオン・シャルパンティエ「日本文学におけるドン・ジュアン」(1906)

—二十世紀初頭のフランスにおける『源氏物語』受容の一資料—

森 真太郎

## 1. はじめに

フランス・ブルターニュ地方の都市レンヌの公立図書館シャン・リーブルに、レオン・シャルパンティエという著者による「日本文学におけるドン・ジュアン」という資料がある<sup>1)</sup>。元の雑誌からこの文章の部分だけが抜き出され、色褪せた厚紙で綴じられた十頁余りの小冊子である。手にするものはこれが『源氏物語』を紹介する資料であることに一日で気づくであろう。三頁目の下部に1906年五月という日付が印刷されているのみで掲載誌情報の記載がなく、館員に尋ねても要領を得ない。この図書館には、フランスにおける日本学の始祖のひとりレオン・ド・ロニの著作が多く所蔵されており、この資料もそうした日本関係のコレクションの一部として収蔵されたものであろうか。この文章の掲載先は *Grande revue* 誌であることがその後の調査で判明した。



ある作品の受容は、それ自体が複雑なモチーフを秘めた広漠たるテーマである。それが『源氏物語』である場合、この作品が西洋のロマン（長編小説）との比較や反応を生み、主人公や登場人物の性格について興味深い対比を生むゆえになおさらのこととなる。そうした意味で、『源氏物語』が二十世紀初頭のフランスにおいてどう受け止められたのかという関心にこの資料はいかばかりか応えるものであろうと思われる。この論の前半では、当時までのフランスを中心とした西洋における『源氏』受容を大まかにおさらいしつつ、この文献の特徴を述べる。後半には翻訳を載せた。

## 2. アーサー・ウェイリー以前

『源氏』の西洋圏での受容において、1925年から1932年にイギリスで刊行されたアーサー・ウェイリーの全訳<sup>2)</sup>が里程標であることは揺らがない。フランスという国に限ってもそれは変わらない。この記念碑的翻訳が及ぼしたものは、一つの文学作品が文化・歴史に与えるものとしては最大級のものであった。ヨーロッパやアメリカでいわゆるベストセラーとなり、フランスにおいてもアーサー・ウェイリーの英訳の影響下に、桐壺から葵までの九帖の訳であるキク・ヤマタ訳が刊行された<sup>3)</sup>。また、ウェイリー訳で源氏に親しみ紫式部を最高の小説家として敬慕したマルグリット・ユルスナールによる「雲隠れ」の巻の創作「源氏の君の最後の愛」(短編)もこのウェイリー訳から生まれた<sup>4)</sup>。ボルヘスによって南米アルゼンチンの書評にも取り上げられもした<sup>5)</sup>。こうした伝播の形跡からも、世界中に無数の読者が生まれていたことを想像すべきであろう。またウェイリー訳を通じて源氏に開眼した者として日本の正宗白鳥がおり「無限大の人生起伏を感じた。高原で星のきらめく広漠たる青空を見たやうな気がした」<sup>6)</sup>という名評が生れたように、返し波が本国をもまた潤したこともまた忘れてはなるまい。

だが、あまりに輝かしいこの業績の陰で、ウェイリー以前の読者の反応を示す資料は概ね等閑に付されているように思われる。当然ながら『源氏物語』の紹介はウェイリー以前にもあった。末松兼澄による最初の十七帖の英訳<sup>7)</sup>(1882)を嚆矢として、アストンヤルヴォンによる日本文学アンソロジーでの紹介などが十九世紀末から二十世紀初頭にかけて刊行されており、西欧の読者は部分的には『源氏物語』の内容を知ることができたのである。そもそも『源氏物語』にはまずその名と評判を知られる契機があり、それ以降の受容の進展があり、その延長上にウェイリー訳があったと考えるのが妥当であろう。後半で紹介する「日本文学におけるドン・ジュアン」というレオン・シャルパンティエの文章はウェイリー以前の受容の一例である。

名のみことごとしうであつても、藝術の伝播にとって大きな一歩がまず名の伝達であることは疑い得ない。『源氏物語』という名が伝わったのはいつ頃かという問いには、日本と西洋とのなれそめのはじめ、すなわち切支丹時代であると答えることができる。イエズス会神父ロドリゲスによる『日本語大文典』は1604年から1608年長崎で刊行され、そしてその縮約版『日本語小文典』は1620年にマカオで刊行された。これは西洋人が書いた初の重要な日本語文法書であり、その中に『源氏物語』の名が言及されていた。西洋人が『源氏物語』という小説の名前を知りうる可能性が文献的にはここに生じている。『日本語小文典』はのちに十九世紀になってフランス語に訳された。『大文典』との校合をなされたうえで東洋学者アベル・レミュザの序文を付して1825年に刊行された『日本語文法の諸要素』*Eléments de la grammaire japonaises*という書籍がそれである<sup>8)</sup>。フランス王立図書館(Bibliothèque du roi, 現在の国立図書館の遠い前身に当たる)に保存されていたポルトガル語原本を用いて翻訳にあたった旨の記載がある。『日本語小文典』で源氏はどのように紹介されているか。ここでは仏訳から引きたい。

「ヨミ」と「コエ」という二種の言語があるために、日本人は三種類の言語を使っていた。そのうちの第一のものは、純粋な「ヨミ」であり、一切「コエ」をまじえない。これはこの国で生まれたそのままの言語である。これは現在ではポエジーや優美な文学に用いられているもので、『源氏物語』や『伊勢物語』等がその代表である<sup>9)</sup>。

ロドリゲスはその文法書の冒頭で、いわゆる大和言葉と漢語の区別から説きはじめている。その文脈で『源氏物語』が『伊勢物語』とともに純粋な日本語、すなわち「ヨミ」で書かれた物語の代表として挙げられる。西洋では音声が言語において絶対的に優位をもつのであるから、日本語の純粋な調べに対する高い関心があったと思われる。それゆえこの紹介のされかたは注目されてもよいだろう。日本語としてのマチエールの純粋性を強調されたかたちで、『源氏物語』の名は西洋人の耳目に触れたわけである。『小文典』のポルトガル語原本は合計でも百部しか刊行されなかったとされ<sup>10)</sup>、仏訳されても読者はごく限られていたろう。だがこの『小文典』の仏訳は、その実用性は措いても、文献的には重要な地位を一時期占めた。というも、この書籍は、当時フランスにおけるほぼ唯一の日本語文法書であったからである。近代において日本文学移入の歴史は、日本語学習の歴史と平行していることはいうまでもない。レオン・ド・ロニ Léon de Rosny (1837-1914) の『日本語文法』 *Grammaire japonaise* (1865) の序文から、興味深いと思われる記述を、少々長くなるが、ここで引いておきたい。

長いあいだ、〔フランスの〕学術界および文学界は、東洋学者たちの研究が日本に向けられるよう懇望していた。現在のところ全アジアでもっとも進展している文明である日本人の文明については、これまで旅行者や諸文献が様々な物語〔記録類〕を提供してきたが、この列島で絶え間なくおこなわれた出版物を調査し、その前にそれら出版物の書かれたイディオム〔日本語〕の知識を獲得しさえすれば、豊穡な実りが学術にもたらされうること、これらの記録からすでにわれわれは予見できていたのである。パリ・アジア協会がロドリゲスの日本語文法を出版し、わずかのちにその補遺を出版したのは、こうした日本および日本語の研究を容易にするためであり、協会もその重要性を十分理解していたのである。だが不幸なことに、この著作は協会を構成する識者のいかなる期待にも応えることができず、学術にいかなる寄与もなしえなかったのである。人々がこの書物に求めた明確で正確な記述はそこになく、さりとて他に研究の手段もないため、日本語の研究はヨーロッパにおいて全体的にみて放棄されてしまったのである<sup>11)</sup>。

日本と西欧の交流が生じる以前あるいはその黎明期において、『日本語小文典』のほかには、シーボルトの持ち帰った日本語資料が学習の糧となったとロニは述べている。その意味では、万国博覧会以前の段階ですでにヨーロッパに大量の資料をもたらしたのみならず資料の企画展示等を行っていたシーボルトの功績はある程度認められなければならないと思われる。ヨーロッパの東洋学者らは、日本と西洋との国交が樹立される以前に、例えばシーボル

トの持ち帰った『書言辞考節用集』に当たって日本語を学習していた。そうした文献の中にすでに相当数の日本文学が（解説が出来たか否かは別にして）含まれていたと思われる。当時の不自由な状況のなかでも、そうした書物の実在が極東の文化や文学への憧れを一部の人人々に熱烈に駆り立てたということはあったであろう。

### 3. アンソロジーによる文学紹介

フランスにおいて、日本文学がある程度の分量の一卷に編まれて初めて紹介されたのは、上記のレオン・ド・ロニの手になる『詩歌撰葉 古代から現代の詩』（1871）<sup>12)</sup>である。その名の通り、『万葉集』からその当時までの和歌や音曲の歌詞、漢詩など七十編の翻訳を収録したものである。この選択には「雑然とした感じ」を与えるものがあり「幕末期の日本で流行した文化・文学を反映したもの」という小沢正夫氏の評価がある<sup>13)</sup>。

『源氏物語』の内容の紹介については、広く行われた『十九世紀ラルース』*Grand dictionnaire universel du XIX siècle* (1866–1876) の「日本 japon」の項目に記載は見当たらないようである。管見では『新・図解付世界百科事典』*Le Nouveau dictionnaire encyclopédique universel illustré* (1885–1891) に、*Gengi Monogatari* の名が現れているが「作者 *Murasaki Shikibu* は女流詩人、五十四帖の物語」とあるにとどまり<sup>14)</sup>、内容を紹介する記述はない。内容を知る術のなかった当時蔓延したのが、日本文学研究家ジョージ・ブスケ *Geoges Bousquet* (1845–1931) による「日本のスキュデリー嬢による退屈な小説」という評価やそれに追隨したチェンバレン *B.H. Chamberlain* (1850–1935) の同様の評言であったが、彼らの読解はそれ自体が真摯なものではあり得なかった。フランスにおいて『源氏物語』の内容が信頼できる学者によって紹介されたのは、英国の外交官であり日本研究者であるアストン *W.G. Aston* (1841–1911) の著作『日本文学史』（1899）が仏訳されたとき（1902）であろう<sup>15)</sup>。1910年にミシェル・ルヴォン *Michel Revon* (1864–1947) による『日本文学アンソロジー』が刊行されるが<sup>16)</sup>、この成果に先立って、英国における成果がフランス人の知識をもまた潤していたのである。

ここで確認しておきたいのは、フランスにおいては英国と比べて、日本文学の紹介が首尾良く進んだとは言い難かったということである。そのことをうかがわせる発言がアストン仏訳に添えられたモーリス・クラン *Maurice Courant* による「文献ノート」の冒頭記述に見える。

十九世紀において、フランスはオランダに次いで日本にもっとも関心を抱いた国であったが、それ以来三十年足らずの間に（その理由をここで詮索することはしないけれども）ドイツやイギリスがなした日本に対する学問の進展や成功は我々の国では続かなかった<sup>17)</sup>。

アストンによるアンソロジーは、佐伯彰一によれば、ドナルド・キーンの浩瀚な日本文学史以前では唯一の日本文学の通史的書籍であり目配りの効いた作品であった<sup>18)</sup>。『源氏物語』に書中最大の分量を割り、非常に高い評価を与えていた。アストンは本居宣長の評釈「源氏

物語玉の小櫛」を消化したうえで『源氏物語』をリアリズムを特徴とする近代小説と並べて位置づけ、先述のプスケやチェンバレンの評価を「不当」として斥けつつ、日本古典中の最高の地位においている。ルヴォンのアンソロジーについてはここでは詳述できないが、『源氏物語』を最高峰とする批評はルヴォンに受け継がれ、さらに拍車がかかることになる。ウェイリー訳以前に日本文学に興味を抱いた西洋人の脳裏には、この両著によって『源氏』への高い評価が印象深く刻まれていたと推測されるのである。

#### 4. シャルパンティエ「日本文学におけるドン・ジュアン」

「日本文学におけるドン・ジュアン」の著者レオン・シャルパンティエ Léon Charpentier (1862–1928) については、以下のような執筆者紹介（あるいは宣伝文）が添えられている。「レオン・シャルパンティエは生まれながらの文学者だといえるであろう。幼少時から戯曲を書き、仲間たちとかんたんな舞台を作って上演していた。13歳のとき、彼はギリシア語の授業を同輩の少年たちにほどこしていた。小説『幽閉された女』*Séquestrée*、詩集『ゆるぎなき歌』*Chansons robustes*、『妖精の才能』*Don de fée*、『社会の秩序』*L'Ordre social*などの作者であり、あまたの雑誌や新聞への寄稿者としても記録を有している。それらの紙誌ではおもに外国文学の紹介を受け持っている。*(Revue Blanche, Revue Bleue, Mercure de France, Revue des Revues* などの各紙、*Aurore, Main, Français, Figaro* などの各誌) *Revue hebdomadaire* 誌と *Revue mondiale* 誌の文藝欄の責任者である。」現在では忘れられているが、当時は新聞や文藝紙などのジャーナリズムである程度活躍した書き手と見てよい。

彼のこの文章は、おそらくジャーナリスティックな契機に触発されて書かれたものである。1906年当時のフランスでは、ムネ・シュリ Mounet-Sully (1841–1916) による『ドン・ジュアンの老い』*La Vieillesse de Don Juan* (1906年上演) という戯曲や、フェルナン・サルネット Fernand Sarnette (1868–1914) による戯曲『ドン・ジュアンの最期』*La Fin de Don Juan* (1906年上映か。書籍は1908年刊) といったドン・ジュアン物というべき作品の上演が相次いでいた。そうした状況で、比較文学的関心を持ったシャルパンティエが、東洋のドン・ジュアンとして光源氏を紹介しようとしたことからこの文章は書かれたようである。

シャルパンティエという人物は東西の文学に探究心の旺盛な人物であったと考えられる。彼が本文の大部分を割いて紹介しているのは「夕顔」の帖であるが、アストンのアンソロジーには、「帚木」と「若紫」の抜粋があるのみで、「夕顔」に関する記述はない。どうして彼は「夕顔」の知識を得ることができたのだろうか。彼は本文にも言及されている末松兼澄の英訳で『源氏』を読んでいたと推測される。これに頼る以外にこの時点で「夕顔」を語ることが可能であったという事実は、ミシェル・ルヴォンのパリ大学の講義等で内容を知っていた可能性を除いては、説明がつかないからである。アストンにおいても末松訳の存在は次のように紹介されていた。「大いに評価されるべき仕事であることに違いはないが、全体的に満足のいく出来とはいえない。訳者〔末松〕は本居の注釈〔「源氏物語玉の小櫛」を持っておらず、〔末松が用いた〕「湖月抄本」は大変こころもとないガイドである<sup>19)</sup>〕。当時唯一の充実した日本文学案内であったアストンの書物で絶賛されている『源氏』に触れたいと願った

読者は、ともかくも末松訳に一応はあたってであろう。シャルパンティエがアストンの著作を読んだ形跡が感じられるのは、シャルパンティエの文章中における紫式部の伝記的記述、すなわち琵琶湖のほとりにある石山寺で『源氏物語』が執筆され、その部屋がいまでも保存されているという伝説や、彼女が皇族に次ぐ家柄の藤原氏の出身であり、紫式部が本名ではないこと、等の記述がアストンの記述と重複するからである。だがこれは決定的な証拠ではない。シャルパンティエは、アストンの記述の他にもいくつかの情報源を持っており、それをもとにこの文章を書いたのである。そしてそれらのソース中に、アストンの中には含まれていない、紫式部墮地獄説を含むいくつかの『源氏物語』伝説を得たのであろう。

『源氏物語』をドン・ジュアンと比較する記述はアストンの紹介にはない。シャルパンティエの文章においても、どちらかと言えば、ドン・ジュアンとの類似ではなく、差異が強調されることになってしまう。この源氏＝ドン・ジュアンの比較あるいは比較の是非は、マルグリット・ユルスナールとスザンヌ・リラルとの中で後年再び繰り返されており、我々の関心を誘うものがある<sup>20)</sup>。

シャルパンティエの『源氏』紹介のもっとも大きな特徴は、「夕顔」の帖が選ばれているということである。彼は「ロマネスク」あるいは「ロマン主義的」という言葉で光源氏の恋愛物語を形容しているが、生霊による夕顔の死の物語を選んだシャルパンティエの「ロマン主義」という言葉の用い方には、情念のほかに怪奇幻想的要素が含まれているとも考えられる。ジャーナリズムが活躍の場であった彼が読者の興味を惹きつけるにふさわしいと判断したのが「夕顔」の帖であったといえるであろう。

\* \* \*

#### 翻訳：レオン・シャルパンティエ「日本文学におけるドン・ジュアン」(1906)

以下、本文中〔 〕は訳者の補足。注はすべて訳者が付したものである。シャルパンティエの記述においては、作者の紫式部、『源氏物語』の内容の細部および歴史的事項についていたるところに誤りがみだされる。光源氏と清和源氏との支離滅裂ともいえる混同、和泉式部の著作についての誤認、『今昔物語』中に紫式部に関する記述がある等である。またここで主に紹介される夕顔の巻の、創作的といってもよい紹介は、解釈の域を超えて、恣意的なものである。『源氏物語』の読者は、別の小説を読む思いさえするに違いない。本文中には様々な原作にはない描写が挿入されており、たとえば夕顔の遺体を運ぶ惟光と右近の道中を描く外景描写や心理描写などは、ほぼ創作とといっていいものになっている。だが、そうした誤りや加工はすべては指摘することはしなかった。なお原文には全体にわたって改行が多く行われ、また「！」や「…」が多用されているが、これは随時省略した。

\* \* \*

レオン・シャルパンティエ著「日本文学におけるドン・ジュアン」

Grande revue 誌 1906年5月16日

『ドン・ジュアン』『ドン・ジュアンの老い』<sup>21)</sup>『ドン・ジュアンの最期』<sup>22)</sup>『ドン・ジュアンの息子』<sup>23)</sup>。これらの作品は、ここに書き切れない他の作品とあわせて、恋愛を至上目的とする主人公ドン・ジュアンが二十世紀というこの時代に依然としてわれわれを魅了しつづけていることを証明している。かつてモリエールの同時代人をわずかながら魅きつけ、モーツァルトを聴いた人々を、また熱狂的にミュッセの作品の読者を大いに魅了したのと同じように。

ドン・ジュアンについて長いページであれ短いページであれ何か書かなかった批評家などいるだろうか。エミール・デシャルネル<sup>24)</sup>がヨーロッパ文学史中でこのタイプの主人公の発展について語ったすばらしい講義を記憶するものは、四十人は下らないであろう。

最近〔ドン・ジュアンの晩年を扱った〕ムネ・シュリ氏とフェルナン・サルネット氏が、愛における「西洋的なもの」と呼びうるものに到達した主人公の、その晩年を戯曲化する優先権（これは尊大かつ困惑させる考えであるが）について張り合っている。しかしこのロマネスクな人物を取り上げる戯曲家がこれからもきっと現れてこよう。戯曲の風趣や気味合いを変えもするだろうし、いまではなんでも過小評価されるものであるからこの主人公が今後さらに過小評価されることはあるにせよ、ふたたび取り上げられるだろう。

そもそも、このタイプは果たして西洋文学だけに属するものなのであろうか。青春の情熱、恋における軽快さ、恋がしばしば覆われる苦痛や悲嘆の暗い力にひるまぬ柔軟さ、こうした性格をもつタイプは、よそでは存在しないのだろうか。これは興味深い問題である。答えはどこに見つかるだろうか。その答えを私は日本に見つける、いま我々がまさに多くのものを発見しているこの国に。この答えは、おそらく読者をびっくりさせるようなものであろう。

はるか以前、我々の数え方でいえば十世紀の時代、マナラの領主が自分の先駆者を認めたであろう一人物が日本文学には存在した。その名を源氏という。長編小説、正確に言えば『源氏物語』*Geste de Genji* というこの物語は、日本の古い数々の物語のなかのひとつである。作品としては「日出づる国」の傑作である。その本名は彼女みずから選んだ仮名によって忘れられてしまった高貴な女性<sup>25)</sup>、すなわち紫式部によって書かれた。天皇家に次ぐ高貴な家の藤原氏に属する女性であることが知られている。

ムラサキはある特殊な状況下で作品を書いた。彼女は皇后の女官であった。ある日皇后はアマテラス女神の巫女に任命されたばかりの自分の娘に、ひとつ物語を書いてはくれぬかとムラサキに頼んだ。この娘はまだ幼く「聖なる処女」の職名を冠せられていたのだが、国のあらゆる小説を読み尽くしており、もうそれらに飽いていた。娘は母である女王にそのことで不満を述べたのである。ムラサキは、無感動になったこの乙女というかませた少女の嗜好を愉しませるため、薬味で濃厚に味付けされた料理を準備しなければならなかった。よって彼女は源氏の君の恋愛遍歴をテーマとして選んだのである。

おもしろい逸話が伝えられている。ムラサキはこの優美な物語を書くために、仏教の寺院で精神を集中しようとした。伝えられたところによれば、ある日紙をきらせたムラサキは、



中国語訳された大般若経のひとつの巻を手にして、その余白に彼女の優雅な物語の二章を書きつけたという。いまでもこの経巻は石山寺にあるムラサキが執筆をした部屋に残されている。この一室は淀川が琵琶湖から流れ出すあたりを見晴らす場所にある。

いまから九世紀もまえの日本の作家であっても、彼女はすでにこのジャンル〔小説〕についての純粋で明確な観念を有していた。以下の小説中にあらわれる驚嘆すべき考察をみるがよい。作者はこの考えを主人公である源氏自身に語らせている。「歴史とは実在した出来事の記憶のことである。一方で小説は社会の生彩ある真実の絵を表現する。小説家は歴史的事実に拘泥しない。小説は生における最良のものをあらわすのであり、趣味にうるさい向きに好まれない要素は捨てて顧みない、だが笑うことを望む人々のためには、喜劇的な要素も大いにこれを尊重しましょう」

源氏は歴史上実在した人物である。彼は859年から877年に位にあった清和天皇の息子である。その当時、いくつかの貴族家からなる寡頭支配により、朝廷の要職は独占されていた。天皇家の人物が公職につくことはこれによって阻まれていた。源氏の母は権勢のない家の生まれであったため、またこの子どもが大変知性に恵まれていたために、彼の父親であるミカドは彼を政争にまきこまないために帝位の座から遠ざけ、後ろ盾となる家を得られるよう早くから結婚させた。愛欲と快楽の友であるにもかかわらず、彼は将軍としてあるいは統治者として才能を遺憾なく発揮し、父の清和天皇の死後は帝国の摂政をまかされた。12世紀になると、彼が始祖であるところの源氏は将軍家による世襲支配を始めた。

日本のドン・ジュアンの恋愛遍歴のすべてをここで描くことは不可能である。ムラサキは源氏の幼少期から筆を起こしている。つづいて、彼の初めての情事、須磨への自主的な流謫、その後の政治中枢への輝かしい帰還。この主人公の性格は、一概に掴むことのできない捉えどころのないものである。源氏は、逆境は忍ぶが幸運においては無防備である。彼は巧みだが、移り気だ。友人たちに対して彼は寛大であり敵に対しても憎しみをあらわにすることはまったくないが、彼らに対してときに不誠実である。簡単にいってしまえば、彼はもっとも上品な感情にはひらかれているが、高貴さの点でより劣る情念〔愛欲〕に支配されている。

紫式部は、この浮薄な物語をたんに執筆したばかりでなく、彼女みずからも移り気で波乱に富む青春時代を送った。そうした経験をひとつひとつ悔悟したすえに、彼女はついに仏教の僧院に完全に隠遁し、般若経を六百回も書き写した。彼女の青春時代の思い出は「和泉式部物語」という小説に用いられており、この虚構のなかには冷泉帝の四番目の息子である愛人と彼女が交わした書簡がふくまれている。最後に今昔物語という六巻からなる一種の長編小説に触れておくと、ここには多くの小説家や詩人の伝記が収録されていて、そこである綺譚が語られている。それによれば、紫式部はその悔悛の情にもかかわらず、地獄に堕ちたとされている。

\*

『源氏のロマン』あるいは『源氏物語』（Ghenzi と発音せよ）は五十四帖からなり、日本人にとってもいささか長大に感ぜられる。末松〔兼澄〕男爵が三分の一に少し満たない分

量、正確に言えば十七巻までを英語に訳している。源氏のドン・ジュアンを思わせる冒険はいつもすべて成功する誘惑の試みであって、みな似通っているのも、あらずじは興味をそそるものではない。だからむしろ、特徴的なエピソードのディテールを通じて、ロマネスクであるだけでなくすでにロマン主義的であったとさえいえる主人公の恋愛遍歴をここで示すほうがよいであろう。

源氏の初めての情事は既婚女性に狙いをつけたものだったが、成功には至らなかった。この結果、小説のはじめの方で彼の自尊心は甚だ傷つけられることになる。だが彼にとってそれはたいした問題とはならない。というのもそのことを考え詰めることはないからだ。彼はこの女に復讐するまさにその手段を見つける。彼は女の夫と友人となり、彼の賞賛の念を得て、しばしば知らないふりをして彼女と顔を合わすことになる。源氏は一度見た女はすべて識別することができるわけだが、ある女性を思えば別の女性からは気がそれてしまう。この既婚女性への度重なる攻勢ののち、彼は六条付近で屋敷を構えるひとりの女性と気の休まらぬ関係を結ぶ。

この界限に通う途中、彼は自分の乳母がその近くに住んでいることをはじめて知る。この立派な老女は幼いがすでに活気に溢れていた源氏をその乳で養うという善行をかつて施したのであった。彼女は息子の惟光の家に隠遁している。だれも源氏の訪れを予期していなかったため扉は閉ざされていた。取り巻きのものが老母あるいは惟光を呼びに行っているあいだ、源氏は外で待っていた。さてここで、訪問の当初の目的であった女性といま通りかかったばかりの隠遁した乳母から源氏の気をそらすような素晴らしく優雅な光景が訪れる。源氏は車上から生け垣に囲われた愛らしい内庭をみとめ、美しい娘たちの一団が彼を眺めているのをみとめる。さらば乳母よ。

この娘たちの背後に、絵画の背景のように、とてもつつましい見た目だが、愛らしく夕顔で飾られた家があるのが見える。源氏は、よく知られた歌の一説であるこの詩句を甘やかな気持とともに口ずさんだ。

Dis-moi voyageur  
Quelle est la fleur qui s'épanouit  
Près de toi, à tes pied?

いいなさい、道行くひとよ  
あなたのそばちかく、あしもとに咲いている  
花がなんであるかを

——女は夕顔<sup>26)</sup> という名前である。かほそい音楽的な声で「もしあなた Monsieur」とこちらに応じてきた。

源氏の乳母の息子の惟光がちょうど到着したので、乳母兄弟〔惟光〕に美しい夕顔の花をもとめに行かせる。美しい娘たちはそれを花束にして扇に添えて彼にわたす。

源氏はこの邸のことを考えるのを急いでやめた。それから彼は乳母とさまざまなことども

を話した。出発の時刻がおとずれ、彼は扇の花を持って行くために手にとった。そのとき、彼は扇の折り目に、繊細な文字で四行詩 *quatrain* が書かれた紙片を見つける。その詩が示す文学的教養とみすぼらしい家のなりとの対称に、源氏はうたれた。すぐさまのほせあがり、理想的な愛人を発見したと彼は信じた。そして惟光に、この邸に住む者が誰なのか正確な調査をするよう命ずる。惟光は源氏の役に立ちたいという欲求にくわえ、陰謀への趣味を持っている。この邸に、ある夫人とその娘と召使いが住んでいることを発見したのち、この娘のもとにひとりの男が通っており、惟光によればそれは源氏の指南役である中将であるということを付け加えて報告したのである。

このため、源氏は彼をよろこび迎え入れたこの邸に、日も暮れてから扮装してでないと訪れぬようにする。彼は高貴な身分を隠し、世間に知られた自分の名前を隠すことにした。いかなる危険もおかさず、罨もしかけられず、ぶしつけな詮索をして彼をこの秘密から引きずり出そうとするものもない、これらの事柄は明白だった。だが、このことつまり危険も予期せぬものも存在しないことがしまいには源氏をいらだたせる結果になる。すなわち、彼にとって必須である恋のまぼろしを自分に見させるため、夕顔をよそに連れ出すことにしたのである。

小説におけるこうした場面の、ロマンティックな色彩に注目してほしい。また、このロマンティズムは、いまでは衰退してしまったにしろ我々の西洋文学で栄えた時代よりもさらに八世紀をさかのぼるということを認識してほしい。

源氏と愛人が、彼女の身をひそめている小さなすみかを出立したのは早暁であった。空がわずかに、白んできている。晴れやかな一日の前触れたるしずけさである。道沿いに、すでに起き出した農民たちが彼らの住居の開いた戸口に立っている。彼らは喜びとともに野に出発する時刻をまっている。この自然があまりに平和と幸福にみちているゆえ、か弱いこの女性をこれから見知らぬところへ連れ出すことに、ほとんど申し訳ない気持ちを源氏は抱いた<sup>27)</sup>。これから向かうところは暗く悲しい場所であり、いつの日か他の慰みの快樂のためにこの女を捨てる場所となるのだ。

途中、戸口で一人の農民が運命を司る仏陀のためにお祈りを挙げている。我々から未来を覆い隠す目隠しを神様が我々に付けてくれていることに感謝の念をいだいているという気持ちを、この農民は祈りの中で唱えていた。この男の落ち着きは、源氏を虚しい気持ちにした。不確かな未来全体へのおもいをまぎらわすために、彼は自分の同伴者に過去のことをいくつか尋ねた。その答えとして、彼女は源氏も方に身も向けず、遅れて空のさわにあらわれ白い月をながめ、憂鬱な詩をただ口ずさんただけであった。

Comme la lune vagabonde,  
Je glisse à la cîme des monts.  
Qu'y a-t-il de vrai ou de faux  
Dans notre amour? Je ne le sais pas.  
Car des nuages sont entre nous!

旅にさすらう月のように  
私は山々のいただきにわけ入る。  
私たちの愛にまことがあるかいつわりがあるか  
それはわからない。  
雲が私たちのあいだを隔てているのだから。

この旅においては夢想の甘美さと風景の魅惑とが溶け合うはずだった。だがそれはむしろ悲しい逃避行じみたものになってしまった。君がこのたび新しく選んだ家では、前もって到着を知らされていないので、執事が出迎えるということもない。使用人たちは起きてはいたが、自分たちの食事しか準備しておらず、しかも米しかない。それゆえ、源氏と女は召使いたちのために炊かれた簡単な食べ物で我慢しなければならなかった。この別荘はかわいらしい建築ではあるが、手入れはされていない。暗い葉陰の松並木の藪は払われていない。淀んだ水のたたえられた池の面は、枯れて感じの悪い草木に覆われているせいで鏡のように光を照り返すこともない。世間から逃れたふたりの新生活のはじめの一日は、陰鬱な飽き足りないものになってしまった。夢見がちな愛人のところはここにあらずで、源氏の気持ちもうわのそらであった。

なにゆえか、一語一語が打つような文句が鉄槌のように鳴り響いて源氏に二つの考えを執拗にせまるのであった。「主上が私をお召しになっている。六条にいる私の愛人が、このあらたな恋を詮索し、復讐しようとしている。彼女はきっと成功するのだ。」

夜がきて、ふたりの恋人たちはしばしの快樂をあげた。まもなく、若い女は疲れて眠りたがった。源氏はあきらめに満ちた従順な様子で、眠りの忘却の中に自分も沈み込もうとした。突然、彼は飛びあがって目覚めた。この物音はなんだらうか。賊がこの家を襲いにきたのだ。彼は起き上がり、愛人の召使である右近を呼ぶ。召使たちを呼ばわり、刀を佩き、家中を走り回る。寢所に戻り愛人の寝室にはいると、そこに気を失っている彼女を見つけた。

このとき、彼の目の前で宙を飛ぶ炎のようなものが通り過ぎた。それはいま一人の愛人、六条に住むひとの姿であった。彼女の似姿であるというより、まさに彼女の生魂そのものであった。魂というものは、自らを分身させ、肉体という住処から離れることができるからである。炎がよぎったり漂ったりして愛人がいまやすむ臥所のうえで揺れ動いている。娘はもう正体を失って身じろぎもしなくなっている。右近がにじり寄ってかけつけたが、生気の失せた哀れな娘の手と頭部に右近は触れただけだった。生気が失せている？ そう彼女は死んでいた。

源氏は苦痛と激しい怒りでうめいた。あらゆる日本人がそうであるように、彼もまじないを信じていた。彼が憶測するに、この哀れな犠牲者に呪いをかけたのはもうひとりの意地の悪いライバルである。犠牲者はいまここに命も失せて、愛することも、相手を苦しめるよう復讐をすることもかなわなくなってしまった。「急げ」と源氏は召使いたちに叫んだ。「惟光を探してこい。まじないに長けた僧である彼の兄も連れてくるよう伝えよ。早く。」召使たちは惟光と僧を探しに行く。だが彼らは戻ってこない。

夜がゆっくりと更けていく。すすり泣きのようなさざめきが庭の木々から聞こえる。右近

は自分のあるじの傍らで先ほどからずっと震え通しである。几帳がひらひらと開閉し、気まぐれな風に押されて音を立てたりする。これは、まじないをするものの力でここに入浴している、目に見えぬあやかしの仕業だと源氏は思う。自分の臆病な刀はこの敵にたいして役に立たないし、たったいまも彼の傍らにいて彼に触れているかもしれない。この打ち払うことができないものの正体がなんであるかを知ってしまったため、怒りと悲しみが源氏にこみあげてくる。

朝日が、風も雲もない空から明るく上る頃には、静寂が邸内を支配していた。右近はいくらか震えがおさまり、源氏もまた怒りの叫びを虚しくあげるのをやめていた。几帳も揺れやんでいた。惟光が到着した。しかし彼はひとりだった。彼の兄である僧はみつからなかった。だが源氏もいまや、如何なるまじないも死んだ彼女をもはや蘇らせることはできないのだと、冷静に理解していた。惟光はこのことが噂になるのを避けねばならないと言った。「君よ、婦人の亡骸は山の別の斜面にある僧院に私が運び込みましょう。そこで彼女のために用いの経をあげることができると思います。君におかれましては、真っ先にここからお離れになることをおすすめします」源氏はこの助言をただちに受け入れそこを立去った。惟光は、昨日は物憂げな愛人を運んだ車にこのたびは遺骸を積んだ。もう死んでいるとはいえ、源氏のきまぐれの犠牲になったこの無知なひとは、桜から舞い落ちて谷から谷へ風に漂う枯葉のように、この上もさらに彷徨しなければならぬのであった。

朝日が喪に服した一行を金色に染めた。時折、道の途中で梅の枝がそよかぜに揺らめき、冷たく動かなくなった女に花が散りかかった。鳥は歌い、この愛の歌は、いま死出の旅路についている、恋ゆえに死んだ女性を祝福しているようであった。愛人の側近であった右近は徒歩で車にしたがっている。彼女はこの惨事を引き起こした当事者を恨むでもなく、ただ主人の死に涙していた。あたかも若く気まぐれで魅力的な源氏の君が彼のために誰かを悲しませたり死に至らせてもそれは自然かつ正当であるかのようであった。惟光の方とはいうと、源氏にとっても厄介な仕事をさせられているということ以外に何も考えないのであった。

ささやかな一行は鴨川べりにたどり着いた。惟光は浅瀬のひとつを知っていた。ふさわしい敬意を払われてしかるべき死者が、車の大部分を占め、惟光は右近の腕をとり無感覚に荷車を運んだ。しばしのあいだ、彼らはただ運ぶことに集中していた。それは彼らに甘美な感覚を味わわせた。それから彼は荷台の上に戻った、横たえられた遺体に飛沫を飛び散らせ、蹄と荷台の車輪をバシャバシャと鳴らせながら、馬が嬉しそうに河を横切った。

それから一行は鳥辺野の墓地に停まった。だが惟光はそこに遺体を引き入れることはできなかった。はじめにその近所にある僧院に到着せねばならず、死者のために、何という儀式だったか、埋葬の儀式をせねばならなかった。僧院に入る前に、惟光はいったん足を止めた。そして源氏の憂悶にみちた情事を軽々しくあつかわぬよう、右近に彼女がどうふるまわねばならないか、どう受け答えしなければならぬか、いかなる慎みをたもつべきかなど、いいきかせた。それから彼らは中に入った。彼らの要望は受け入れられ、デリケートな問題も解決したのであった。

さて恋焦がれ失意に沈んだ君はどうしていたろう。源氏は、かぐわしい田舎をさまよっていたが、とつぜん歩みをとめた。彼女から離れる一歩一歩の歩みが、喪失の悔恨をつのらせ、

逃れたと信じたはずの苦しみにいっそう彼を近づけるのであった。女ゆえ、というよりも女が与えてくれた至福ゆえに、源氏は昨日の愛の避難場所であった邸に再び戻っていった。しかし何ということであろうか、陽に照らされた庭に縁取られた邸はとても魅力あふれるものにもかかわらず、さっぱりとして可愛らしいあの建物は彼の心を今おそろしいほど暗鬱にさせた。何時間かのあいだ、彼はあえて重い荷のような思いを噛みしめた。それからいまでも目に鮮やかな女との甘美なひとときと幸福な日夜を思い出そうとした。いつとき立ち現れた亡き女の幻は欲望を増大させた。しかしこの欲望は、孤独と死という厳然たる現実につきあたり大きな苦痛へと化した。源氏はいま失われた愛人を生前にもまして愛しているのであった。

不幸の原因となった、見えない敵の住処であるこの邸を去り、昨日の逃避行で通過した道をふたたび彼はたどった。幸福がこの道を通って忘却へと変じ、愛人は墓へと奪い去られたのである。日も暮れてだいぶたってから、彼は鳥辺野の僧院に到着した。誰に見られることもなく扉を抜けた。それから彼はいきあたりばつりに僧院のあちこちを探した。彼が感じたのは沈黙でしかなかった。それから切れ切れの音節が聞こえた。そのとき、彼は女の声でゆっくりと唱えられる供養の読経をきいたのであった。彼は庭と部屋とを隔てる薄い紙でできた壁面に耳を押し当てた。部屋の中では哀切な祈り声かとぎれなく続いている。そこに彼は右近の声を認めた。この声だけが、やんだり起ったりしていた。遺体のそばに付き添うのはこの女たったひとりだけだということがわかった。彼は部屋に入った。もはや永久に生を吹き返すことのない美しいひとのそばに悲しみにくれて彼は腰を下ろし、道々自分で想像してきたよりは激しくないにせよ泣くのであった。彼はこれから右近に長々と「夕顔」の家族や幼少時代についてきこうと思っていた。

しかし空が白く染まって夜も明け、ものの輪郭をやさしく浮かび上がらせるようになった。鳥が鳴きはじめ、源氏は去った。彼は何度もうしろを振りかえった。愛人の死の場所となった邸を通ることはもうなかった。彼はまっすぐ帰京した。そして宮廷に出仕した。

彼はまもなく都で、これまで逢ったいかなる女性よりも美しく魅惑的な若い娘を見初めた。すぐさま彼は彼女にたいして鋭い欲望を感じたが、夕顔の思い出があったために、彼は自分の誘惑者としての力をこの新たな獲物におよぼすことを数日間とどまった。この若い娘はタユウといった。彼女には財産はなかったがとても高貴な身分であった。彼女は音楽をとても愛し、すべての小説や詩を愛していた。彼女にはじぶんと同じように貧しく後援者のいない婚約者がいた。彼女をよろこばせるために源氏はその婚約者に名誉と地位を与えようと約束した。タユウは自分の婚約者がそうしたものを持っていなかったのではよこんだ<sup>28)</sup>。

長大な源氏の恋愛遍歴は、権勢を握りたいという野望を彼が抱くときまでつづく。彼の最後の情事は特徴的だ。

須磨にいたころのことであるが、彼があるとき田舎を逍遙していたとき、半ば開いた扉の向こうに、何とも甘美な光景が見えた。ひとりの年老いた祖母である女性が、これまでに見たこともない可愛らしい少女に詩を教えていた。彼は中に入って名前を名乗り、この子の将来の教育をまかせてもらおうといった。この少女は成長してから源氏の心を掴み妻となる。

源氏とドン・ジュアンの性格上の違いについていくつか指摘することができる。両者とも

恋愛において移り気で満たされることはなく、またいずれも劣らず自分が誘惑した女性の運命に思い煩わないが、源氏のほうは無道徳的〔道徳観念のないこと〕amoral、ドン・ジュアンのほうは背徳的〔immoral〕で神へそむく性質をもっている。源氏とはいうと、彼の神々を攻撃することもなく、神々も彼がさまざまな肉体的恋愛をすることを禁止してはいない。貞潔さは「日出づる国」の大きな美徳ではない。この放恣 incontinence はブツダの教えを傷つけることはない。反対にドン・ジュアンは彼の幼少期に教え込まれた聖なる掟に対抗している。

日本の恋人を不安にさせる幽霊たちは、道からそれた魔術師の仲間に過ぎないが、〔ドン・ジュアンにおける〕石像の騎士は裁判者として語る。源氏が生涯のおわりに来し方を振り返れば、たんなる過去を見るに過ぎないだろう。だがドン・ジュアンは、もし彼がまだ深く思索することができて、健康上の問題を受け入れることが可能であれば、これまで自分が歩んできた道程をふりかえり、切に永遠を求めた一面が自分にあったことを認識したに違いない。ドン・ジュアンが無信仰にたどり着いたのに比べ、源氏は信仰を持っている。というのも仏教徒としての信仰は彼の情念をさまたげないからである。彼は霊を信じており、超自然的なものの存在を認めている。というのも、それは彼がもっとも自然的なものだと判断すると抵触しないからだ。恋愛は無数の〔超自然からくる〕揺らぎや、たえまなく変化する息吹に左右される。

後世の小説家にしたがえば、この主人公の恋の物語を書いたという理由で、長い間そのことを後悔していたにもかかわらず、ムラサキは地獄に落ちたのだという。なるほど、しかしムラサキはいかなる男性も名声においては匹敵できない女性であった。厳しい非難の背後には〔男性側の〕嫉視があった。ムラサキは恋愛文学において先駆者である。恋愛の道において女性は必要な同伴者であるのに、古い平安時代の仏教徒がそうしたように、〔現代の〕女性が〔諸権利の獲得において〕足踏みするのが良いという意見は、認めることなどできないし、声高にかつ厳然と否定すべきである。これはひとつの哲学、もしくは予見であり、わたしたちを解放する考えであって、いままさに検討されつつあることなのである。

〔翻訳おわり〕

\* \* \*

## 註

- 1) Bibliothèque des Champs Libres, カタログ番号 (cote) HP13667. « Extrait d'une revue du 16 mai 1906 » という図書館による記載がある。
- 2) Arthur Waley, *The Tales of Genji*, George Allen & Unwin, London, 6 vol, 1925–32.
- 3) *Le Roman de Genji*, Plon, 1928, 316p. なおこの書籍については、エステル・レジェリー＝ボレー「フランスにおける『源氏物語』の受容」、お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター研究年報 5、2009、109–117 に詳細な解説がある。
- 4) Marguerite Yourcenar, « Le dernier amour du prince Genghi », *La Revue de Paris*, 15 août 1937.

ユルスナールはマチュー・ガレーとの対談『目を見開いて』で (*Les Yeux ouverts, entretiens*)

de Marguerite Yourcenar avec Mathieu Galey, Livre de poche, 2003. (Édition du Centurion, 1981), p.110.) で「もし、もっとも尊敬する小説家は誰かと問われれば、尊敬と恭順の念とともに紫式部の名が、まさきに浮かんできます。まさしく偉大な小説家であり、十一世紀の日本のもっとも偉大な女性小説家なのです、つまり日本において文明が究極に達した時代の小説家なのです。すなわち、中世日本のマルセル・ブルーストです」と答えている。

- 5) « El Hogar » 誌 (1938年8月19日)。Borges, *Ceuvres complètes*, tome I, « Bibliothèque de la pléiade », Gallimard 1993, p. 1169: « Il existe une traduction française intégrale des neuf premiers chapitres (*Le Roman de Genji*, Plon, 1928), et l'*Anthologie de la littérature japonaise* de Michel Revon en donne quelques pages. »
- 6) 正宗白鳥「再び英訳『源氏物語』につきて」(初出、読売新聞、昭和8年11月15日)『正宗白鳥全集』第22巻、福武書店、pp.186-187.
- 7) *Genji monogatari: the most celebrated of the classical Japanese romances*, Trübner, London, 1882.
- 8) Le P. Rodoriguez, *Eléments de la grammaire japonaises*, traduits du portugais sur le manuscrit de la *Bibliothèque du Roi*, et soigneusement collationnés avec la grammaire publiée par le même auteur à Nagasaki en 1604, par M. C. Landresse, Librairie orientale de Dondey-Dupré Père et Fils, 1825. 岩波文庫『日本語小文典』の訳者、池上岑夫氏によれば、全文訳ではなく編訳というものに近く、不正確な部分も多いとの指摘がある。
- 9) Le P. Rodoriguez, *Eléments de la grammaire japonaises, op.cit.*, p. 2: « A cause de ces deux espèces de mots, *yomi et koyé*, les Japonais ont trois sortes de dialectes; le premier est de pur *yomi*, sans aucun mélange de *koyé*; c'est la langue naturelle et primitive de la nation; c'est celle dont ils servent aujourd'hui pour la poésie et pour les livres de littérature légère, tels que *ghenji monogatari, ize monogatari* et autres. »
- 10) 岩波文庫『日本語小文典』の訳者、池上岑夫氏の解説による。
- 11) Léon de Rosny, *Grammaire japonaise*, deuxième édition, Maisonneuve et cie, 1865. 序文の冒頭より。「Depuis longtemps le monde scientifique et littéraire désirait ardemment que les investigations des orientalistes fussent dirigée vers le Japon. Les récits des voyageurs et les documents qu'ils fournissaient sur l'état de la civilisation des Japonais, aujourd'hui l'une des plus avancées de toute l'Asie, avaient fait entrevoir la riche moisson que la science pourrait recueillir dans les perpétuelles publication de ces insulaires, aussitôt qu'elle aurait acquis l'intelligence de l'idiôme dans lequel elles sont écrites. C'était dans l'intention d'en faciliter l'étude, et parce qu'elle en avait trop bien compris l'importance, que la Société Asiatique de Paris publiait, dans le cours des premières années de son existence, une traduction française de la Grammaire japonaise du P. Rodriguez, et peu après, un supplément qui devait la compléter. Malheureusement cet ouvrage n'a pas répondu aux grandes intentions des savants qui composaient alors cette Société, et cette publication ne put amener aucun bon résultat pour la science. Aussi, faute de trouver, dans ce livre, les notions claires et précises qu'on y venter chercher, et à défaut d'autres instruments de travail, l'étude de la langue japonaise fut généralement abandonnée en Europe. »
- 12) *Anthologie Japonaise, Poésies anciennes et modernes*, traduction en français et publiée avec le texte original, Maisonneuve et cie, Paris, 1871.
- 13) 小川正夫訳・編『フランスの日本古典研究』、ペリかん社、1985、pp. 268-269。
- 14) *Le Nouveau dictionnaire encyclopédique universel illustré*, Paris, 1885-1891, volume III, p.446.



- 15) W. G. Aston, *Littérature japonaise*, Traduction de Henry. D. Davray, Almand Colin, 1902, 396p.
- 16) Michel Revon, *Anthologie de la littérature japonaise*, Librairie Delgrave, Paris, 1910, 476p.
- 17) *Ibid.*, p.VIII: « Si la France a été au dixième siècle la première, après l'Hollande, à s'intéresser au Japon, depuis lors et pendant une trentaine d'année au moins (et je n'ai pas à rechercher ici les raisons de ce fait), les études japonaises n'ont pas été poursuivies chez nous avec autant de suites et de succès qu'en Allemagne et l'Angleterre ; [...] » この note は仏訳に付けられたもので、日本研究資料の文献がジャンル別に記載されている。当時の知的範囲が窺える良い資料であろう。執筆者の Maurice Courant (1865–1935) は東洋学者で、北京やソウルで通詞として活躍のちにリヨン大学教授。『仏文雑誌』にも寄稿がある。
- 18) 佐伯彰一『外から見た日本文学』、TBS ブリタニカ、1981、p.133。
- 19) W.G. Aston, *Littérature japonaise, op.cit.*, p.88 : « Bien que ce soit un fort honorable travail, il n'est pas entièrement satisfaisant. Le traducteur n'avait pas le commentaire de Motoori, et l'édition Koghetsouçô est un guide fort incertain. »
- 20) このことに関しては、拙論で触れたことがある。Shintaro MORI, « Yourcenar, Genji et Don Juan » dans *Marguerite Yourcenar et la culture du masculin*, dirigé par Marc-Jean Filaire, (Lucie éditions), pp. 89–100.
- 21) *La Vieillesse de Don Juan* (1906 上演). 後出のムネ・シュリ [Mounet-Sully, 1841–1916] がピエール・バルビエと制作した戯曲。
- 22) *La Fin de Don Juan* (1906 年上演か。書籍は 1908 年刊) 後出のフェルナン・サルエット (Fernand Sarnette, 1868–1914) の作品。
- 23) *Le Fils de Don Juan* (1896 刊) ガブリエル・トラリウ (Gabriel Trarieux, 1870–1940) の作品。
- 24) Emile Deschanel (1819–1904) 作家、政治家。第 11 代フランス大統領ポール・デシャルネルの父。
- 25) ここで「高貴な女性」とした単語は *princesse* であり、そのまま訳せば姫、大公 (公爵) 夫人などが該当する。
- 26) 著者は「朝顔」 *gloire de matin* と誤記あるいは混同しているが、すべて「夕顔」に訂正した。
- 27) 夕顔は都に住んでいるためこの件が誤りであることは言うまでもない。
- 28) 当然のことながら『源氏物語』中にこのような人物はおらず [末摘花のことか]、混乱している。